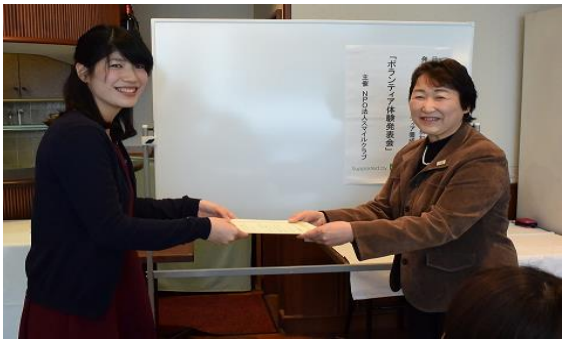
# 「発達障がい児の運動指導に携わる
# スポーツボランティア養成事業」
# 報　告　書



２０１５年３月

NPO法人 スマイルクラブ

Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

# 目　　次

１．はじめに　ＮＰＯ法人スマイルクラブ理事長　大浜あつ子
２．目　　的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２
３．事 業 概 要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３
（１）委員会の開催・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３
（２）ボランティア研修
①ボランティア研修会の開催・・・・・・・・・・・・・６
②チラシ作成と配布・・・・・・・・・・・・・・・・・・７
（３）講習会の開催・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・８
①ＣＰＲ＆ＡＥＤ講習会・・・・・・・・・・・・・・・８
②技術指導講習会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・８
（４）ボランティア体験発表会・・・・・・・・・・・・・・・１０
４．発達障がい児の運動指導に携わる
スポーツボランティア養成事業について
千葉県立柏中央高等学校　宮部　栄一・・・・１９
５．発達障がい児の運動指導に携わる
スポーツボランティア養成事業を通して
千葉大学教育学部　　谷藤　千香・・・・２０
６．発達障がい児の運動指導に携わる
スポーツボランティア養成事業について
社会福祉法人柏市社会福祉協議会ボランティアセンター
吉本　祥子・・・・２１
７．発達障がい児の運動指導に携わる
スポーツボランティア養成事業を通して
千葉県立松戸高等学校　和志武　勇士・・・２２
８．「スポーツボランティア養成事業」報告書
千葉県立つくし特別支援学校　宮下　和洋・・２４
９．本事業を通して
ＮＰＯ法人スマイルクラブ事務次長　山田　亜矢子・２６

# 1.　はじめに

自閉症児の母親に頼まれて始めた「運動が苦手な子の教室」ですが、１７年が経ち子どもの数は１０人から現在では２００人を超える人数になりました。教室会場も１か所から１府５県１０市で開催するまでになりました。
ほとんど大きな広報活動はしていないにもかかわらず、口コミとホームページからの情報でここまでになったことから、放課後活動としてのこの教室の存在意義を感じながら、スタッフ一同指導に携わっています。

私たちは、障がい児の専門家ではなく、体育の教員を目指してきたスタッフが多く、子どもたちと関わる中で逆に学ばせてもらっているという感じです。運動が苦手な子の指導の基本は、障がいのあるなしにかかわらず、大きな差はないことから、指導プログラムは健常児に指導するのとあまり変わりのないことを行ってきました。

指導の成果をみるには、健常児では体力の向上や、運動技能の上達ですが、発達障がいのある子どもにとっては、挨拶が出来るようになったことや、順番が待てるようになったなど、他人とのコミュニケーション能力などの精神面でも変化が大きく、このことが体力だけでなく大きな成果になります。この成果をあげるためには、指導者だけでなくボランティアスタッフとして携わってくれる方が多くいることがとても大切です。初めての人や場所に慣れにくいという特徴のある子どもたちですが、多くの人と接する中で、徐々にではありますが、初めて来たボランティアのお姉さんやお兄さんにも、普通より早く慣れることができるようになっています。また、指示通り動けない子ども達も、多くのボランティアに支えられて、教室のプログラムをこなしていけるようになっています。

そして、何より大事なのは、多くのボランティアに携わってもらうことで、発達障がい児の理解者が増えるということです。そのことで子ども達が大人になり社会に出る頃には、今より住みやすい世の中になっているというところにつながっていくと信じています。

この度は、日本財団の助成のおかげで、委員会を含めて充実したボランティア養成をすることが出来ました。今後もこの成果を生かして頑張ります。
最後に、今回の委員会にご協力いただきました関係者の方々に感謝の意を表してはじめの言葉とさせていただきます。

NPO 法人スマイルクラブ
理事長　大浜　あつ子

## ２．目的

年々増えている発達障がい児のスポーツ・運動指導教室「運動が苦手な子の教室」を始めて１７年が過ぎ、この教室には多くの高校生・大学生がボランティアとして参加してくれている。今ではこのボランティアなくして教室は運営できないほど重要な存在となってきた。そして自治体と夏休みを利用し、ボランティアの養成を協働で行なうということも増えてきた。しかしそこにはまだ課題も多い。例えば

１．ＮＰＯについての理解不足

２．発達障がい児についての理解不足

３．発達障がい児への具体的な接し方が分からない

などである。

これらの課題を乗り越えることでさらにボランティアとしての資質を向上できると考えている。そして高校生、大学生を中心にボランティア養成事業をモデルとして構築していくことで、今後の発達障がい児の支援を充実していきたい。

## ３．事業概要

### （１）委員会の開催

事業推進にあたり委員会を設置し、進めていくものとした。

**【委　　員】**

| | | |
|---|---|---|
| 1 | 宮　部　栄　一 | 千葉県立柏中央高等学校　教諭 |
| 2 | 川　北　準　人 | 東京成徳大学　教授 |
| 3 | 谷　藤　千　香 | 千葉大学　准教授 |
| 4 | 渡　邉　貴　裕 | 順天堂大学　准教授 |
| 5 | 和志武　勇　士 | 千葉県立松戸高等学校　教諭 |
| 6 | 宮　下　和　洋 | 千葉県立つくし特別支援学校　教諭 |
| 7 | 吉　本　祥　子 | 社会福祉法人<br>柏市社会福祉協議会ボランティアセンター |
| 8 | 大　浜　あつ子 | ＮＰＯ法人スマイルクラブ理事長 |
| 9 | 大　浜　三　平 | ＮＰＯ法人スマイルクラブ理事 |
| １０ | 山　田　亜矢子 | ＮＰＯ法人スマイルクラブ事務次長 |
| １１ | 佐　藤　　楓 | ＮＰＯ法人スマイルクラブスタッフ |

上記委員による委員会を4回開催した。委員会の中で事業の内容を確認、作成して、各学校へのボランティアの募集をおこなった。

○第１回委員会

日　　時　２０１４年5月３０日（金）１９：００～２１：００

場　　所　アミュゼ柏内　柏中央近隣センター会議室 D

会議内容

① スマイルクラブ活動紹介
　本事業趣旨について
② 各委員自己紹介
③ 本事業内容説明

○第２回委員会

日　　時　２０１４年7月１１日（金）１９：００～２１：００

場　　所　アミュゼ柏内　柏中央近隣センター会議室 D

会議内容

① 安全研修会（CPR＆AED 研修会）の報告
　７月６日（日）柏市旭町近隣センター
② 完成したスポーツボランティア募集チラシの配布について
　夏ボラのススメのご案内
　「運動が苦手な子の教室」の各教室にて OJT 形式で研修
　８月５日～７日「運動が苦手な子の教室」プール教室
③ 風船バレー大会のスポーツボランティア募集について
④ 第１回スポーツボランティア技術指導講習会について

○第 3 回委員会

日　　時　２０１４年１０月３１日（金）１９：００～２１：００

場　　所　アミュゼ柏内　柏中央近隣センター会議室 D

会議内容

① 「運動が苦手な子の教室」の各教室にて OJT 形式で研修
　８月５日～７日「運動が苦手な子の教室」プール教室
　「夏ボラのススメ」の報告

② 第１回スポーツボランティア技術指導講習会の報告
　１０月１９日（日）千葉県立柏中央高等学校

③ 風船バレー大会のスポーツボランティアの報告

④ 冬のボランティア募集チラシについて

⑤ 第 2 回スポーツボランティア技術指導講習会開催について

⑥ ボランティア体験発表会について

○第 4 回委員会

日　　時　２０１５年3月２７日（金）１９：００～２０：３０

場　　所　アミュゼ柏内　柏中央近隣センター会議室 D

会議内容

① 第２回スポーツボランティア技術指導講習会の報告
　１月２５日（日）千葉県立柏中央高等学校

②ボランティア体験発表会について

③報告書について

③本事業の振り返り

## （２）ボランティア研修

### ① ボランティア研修会の開催

高校生、大学生ボランティアを中心に募集し、発達障がい児の運動教室「運動が苦手な子の教室」の夏のプール教室、通年開催している「運動が苦手な子の教室」及びイベント等にボランティアとして参加してもらい、ＯＪＴ研修をおこなった。その際、マニュアルを配布しボランティアとしての理解や役割を伝えた。

ボランティア参加者　計９２名

**《「運動が苦手な子の教室のプール教室」》**

日　時　２０１４年８月５（火）～７日（木）９：３０～１２：３０

場　所　柏市立柏高等学校

ボランティア参加人数４２名

**《「運動が苦手な子の教室」の各教室・イベント》**

ボランティア参加人数５０名

（「運動が苦手な子の教室」のプール教室）

（ボランティア参加証授与）

（ボランティアの皆さん）

（「運動が苦手な子の教室」クリスマス会）

② チラシ作成と配布

ボランティアを募集するためにチラシ夏用2000枚、冬用2000枚を作成して、高校、大学、柏市、松戸市に配布した。

## （３）講習会の開催

### ① ＣＰＲ＆ＡＥＤ講習会

指導面で安全性を確保することは最重要であり、そのためにＣＰＲ（心肺蘇生法）及びＡＥＤ（自動体外式除細動器）講習会を行った。ＣＰＲ（心肺蘇生法）の実技指導、ＡＥＤ（自動体外式除細動器）の講習を受けた。

《研修概要》

第１回　ＣＰＲ＆ＡＥＤ講習会

講　師　荒井　宏和先生

流通経済大学准教授　日本赤十字社救急法指導員･ライフセーバー

日　時　２０１４年7月6日（日）AM９：００～PM１１：００

場　所　柏市　旭町近隣センター会議室Ａ、体育室

参加者１６名

（柏市旭町近隣センターでのＣＰＲ＆ＡＥＤ講習会の様子）

### ②スポーツボランティア技術指導講習会

体育指導方法や補助の仕方、スポーツアレンジ術などを、実戦経験を積んだ先生より学ぶ。

《第１回スポーツボランティア技術指導講習会》

第１回　講　師　　大浜　あつ子（ＮＰＯ法人スマイルクラブ理事長）

日　時　２０１４年１０月１９日（日）AM9:３０～AM１１：３０

場　所　千葉県立柏中央高等学校　体育館

参加者　４０名

発達障がいのある子も参加する「運動が苦手な子の教室」を開催し、その指導に 16 年のキャリアを持つ大浜あつ子理事長から「運動が苦手な子」に対しての声のかけ方、接し方、運動やゲームを行う際に気を付ける事につい

て学び、実際に身体を動かして体験した。
サッカーなどを年齢、人数、技術別に簡単なルールにアレンジして楽しむ方法をグループによる実践で学んだ。

（大浜先生の講習会の様子）

《第２回スポーツボランティア技術指導講習会》
第２回　講　師　飯島　正博先生
（順天堂大学スポーツ健康科学部健康学科　准教授）
日　時　２０１５年1月２５日（日）ＡＭ9：３０～ＡＭ１１：３０
場　所　千葉県立柏中央高等学校　体育館
参加者　３８名

自閉症など発達障がい児に非常に多くみられる不器用な子どもへの動作法を開発、発展させてこられた順天堂大学飯嶋正博先生に、障がい児が感じるフレル（他者接触）こととサワルことの違い、運動機能の発達における腰の重要性などの講義と身近にあるもの（100 円ショップで買えるものなど）を使って、バットにしたりラケットにしたりして運動をおこなう具体的な運動プログラムや指導法、障がいのある子どもが楽しめるような種目を教えていただいた。

（飯嶋先生の講習会の様子）

## （４）ボランティア体験発表会の開催

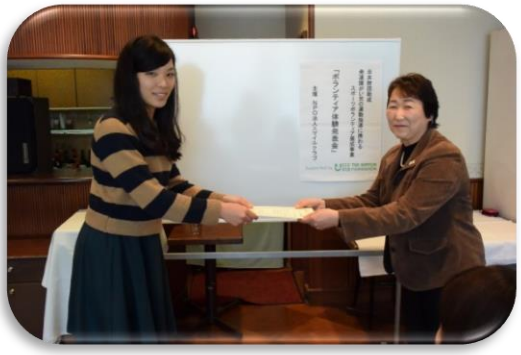
ボランティアをすることに各人が意義を感じることが必要である。これまで、当クラブでは感謝会として１年に１回はボランティアを招待しての食事会を開催してきたが、体験発表をして同じ体験をしてきた者同士で共有できる会を開催することでボランティアの意識高揚を促す。

日　時　２０１５年2月２２日（日）ＰＭ１３：３０～１６：００
会　場　モダンタイムススペシャルルーム
参加者　２５名

ボランティア体験発表者

① 藤　田　美　紀（順天堂大学４年生）
② 河　村　芳　郎（元Ｊリーガー）
③ 染　谷　香　織（看護師）
④ 鈴　木　香弥子（幼稚園教諭）
⑤ 和志武　勇　士（千葉県立松戸高等学校教諭）

総 評　　谷藤　千香先生（千葉大学教育学部）



（ボランティア体験発表会の様子）

# ボランティア体験発表紹介

## １藤田　美紀さん（順天堂大学４年生）

私は、養護教諭になりたくて順天堂大学に入学をしました。しかし、養護教諭の仕事内容や役割を授業で学んでいくうちに自分の性格に合っているのか、本当にやりたいことをできる仕事なのか、将来の進路に悩むようになりました。そんな時に授業で興味を持った内容が「特別支援教育」でした。でもまだ、当時の私は障がいがある児童生徒と関わったことがなく、「特別支援教育」の対象である児童生徒に対して自分がうまく接していける自信がありませんでした。養護教諭と特別支援学校教諭で進路について悩んでいたころ、先輩に紹介されて来るようになったのがスマイルクラブのボランティアでした。

私はスマイルクラブでたくさんの経験を積み、多くのことを学んできました。まずは、子どもたちとの関わり方についてです。学年や年齢、障がい種に応じた言葉掛けの仕方、また一人一人の性格を考慮した接し方などを先生方や先輩方の指導を見て、また実際に自分も行うことで学ぶことができました。さらに子どもたちの性格が分かってくると、その行動の背景も考えたうえで、状況に合わせて言葉を選ぶことができるようになりました。次に、子どもたちに「できた！」という自信をつけさせることについてです。学校の体育が良い例ですが、能力も様々な子どもたちが参加する教室で同じ内容のものをする場合、どうしてもできる子とできない子が出てきてしまいます。しかし様々な段階を設け、時には先生が力を貸したり、試合時にはオリジナルのルールを作るなどの工夫がなされ、どの子も課題を達成できるような環境作りがなされていました。子どもたちの「できた！」という笑顔や自信は、周囲の人をも笑顔にさせるパワーがあり、そして何よりその子自身の成長に繋がるのだと感じました。指導者のちょっとした工夫で子どもたちの可能性を広げられる、これはボランティアをして実際に子どもたちの成長の様子を長い目で見てこれたから気付けたことだと思います。そして最後に、指導者としての態度についてです。私の働きかけではなかなか行動してくれない子が、大濱先生、小川先生の働きかけでうまくできていることが多々ありました。自分となにが違ったのか、どのようにアプローチしていけばよかったのか、失敗から学び自らの成長に繋げていくことができました。指導者としてのモデルを見ながら子どもたちと関わっていけて、とても勉強になりました。

スマイルクラブでのボランティアを通して自分自身成長できたと共に、特別支援学校教諭として働く自信をつけることができました。しかしそれよりも、

子どもたちが「藤田先生」と笑顔で駆けつけてくれたこと、「〇〇ができるようになったよ！」と嬉しそうに話してくれたこと、そして子どもたちの成長の様子を自分が携わりなら間近で見られたことが私にとって大きな宝物となりました。このボランティアでの経験を活かしながら、４月からは教師として子どもたちと接していきたいです。

## ２河村　芳郎さん（元Ｊリーガー）

私は、私の叔父が山口県でスマイルクラブ山口を立ち上げるというので、そこのスタッフとして働くための知識や経験を積むために、柏のスマイルクラブ本部でお世話になることになりました。なぜ私がスマイルクラブをやりたいと思ったかというと、もともと私には２つの夢がありました。１つ目はプロのサッカー選手になることです。２つ目は山口にＪリーグチームを作ることでした。私の夢を知ってか知らずかわかりませんが、私が大学を卒業する１年前ぐらいに山口にＪリーグを目指して活動するレノファ山口というチームが立ち上がりました。迷わず私はレノファ山口への入団を決めました。レノファ山口がＪリーグに上がればプロサッカー選手になるという夢と山口にＪリーグチームを作るという私の夢が同時に２つ叶うからです。一石二鳥ですね。夢の一石二鳥ってすごいですよね。ですが人生そんなに上手くいくはずもなく、私はレノファ山口を退団することになり、１つ目の夢を諦める事になりました。プロのサッカー選手になることを諦めた私でしたが、スポーツをするのが大好きなので夢を少し方向修正してプロのスポーツ選手になりたいと思い、サッカーで鍛えた脚力を活かして競輪選手を目指すことにしました。スマイルクラブに来る直前までは２年間、競輪選手を目指して毎日自転車に乗っていました。公道を自転車で時速７０キロくらいで走っていたので、今思えば、すごく危ないことをしていたので２年間無事でよかったなと思います。あとプロの競輪選手と一緒に練習していましたので、この選手は練習しているとか、この選手は練習していないとか競輪の山口支部所属の選手の情報は持っていますので競輪の予想に興味のある方はあとで教えますので遠慮なく聞いてください。話は戻りますが、競輪選手を諦めようと思っていた時にちょうど叔父からスマイルクラブの話があり、また夢の方向修正をして今度はスポーツの指導者のプロになりたいと思い志願しました。ちなみに私のもう１つの夢は昨年叶いました。レノファ山口がＪ１、Ｊ２の下のＪ３に昇格し、見事山口県にＪリーグチームが誕生しました。

ここからはスマイルクラブに来てからの話ですが、私は今まで球技はほとん

どサッカーしかやってこなかったのですが、スマイルクラブに来てから、今は月曜日と火曜日と水曜日に昼の教室と夜の教室２回ずつ計６回バレーボールの教室に入らせて頂いております。今ではネットを一人で張れるようになりましたし、若干怪しいですが審判を任せられたりもしています。金曜日には、バスケットボール教室にも入らせて頂いています。サッカーから見たバレー、バスケット。逆にバレー、バスケットから見たサッカーなど違う視点でその競技の面白さやいいところなどを発見することができました。練習方法もサッカーに生かせそうな練習も多くすごく勉強になっています。

ボランティアの方々に多く参加して頂いている「運動が苦手な子の教室」には、おもに木曜日と土曜日に入らせて頂いています。

「運動が苦手な子の教室」には一生涯スポーツを楽しんでもらうことが目的のチャレンジスポーツ教室というのがあります。そこに来てくれている二宮一太君という子がいます。一太君は事故の影響で左足が思うように動きません。ですが電車を使って駅から歩いて教室に通っています。一太君はサッカーをしています。ですが柏市周辺に一太君のような子が入れるクラブはなく、一太君は横浜市にあるサッカークラブに通っています。日本には一太君のような子が入れるサッカークラブはほとんどありません。

私は「運動が苦手な子の教室」やさまざまなスポーツ教室の指導経験を活かして山口県に一太君のような子が入れるサッカークラブを作りたいです。それが私の夢であり使命だと思います。

## ３染谷　香織さん（看護師）

初めましてただいまご紹介に預かりました染谷香織です。

私は今富勢東小でボランティアをさせていただいているのですが初めましての方もいらっしゃるのでまず私がボランティアを始めたきっかけとスマイルクラブに出会ったきっかけを話させて頂きます。

中学生の頃母がスマイルクラブのバレーボール会員だったことから大浜さんや三平さんと知り合いました。そこでスマイルクラブの存在を知り、そこでは楽しくバレーボールをさせていただいていました。中学校を卒業するのもあり一度退会をしてしまったのですが、高校三年生の夏に、友人からスマイルクラブの水泳教室に誘いを受けました。そのことがきっかけとなって富勢東小でボランティアをさせていただいています。水泳教室では三日間というとても短い間でしたが、子どもたちの成長する姿・キラキラとした笑顔を見ることが出来て、嬉しく思ったのを覚えています。その後、水泳教室だけではなく「運動が苦手な子

の教室」があることを知りボランティアとして参加させていただきもう５～６年になりました。
私は弟が多いこともあり、小さい子どもたちと関わることが好きでボランティアを始めるのに苦労などはなかったのですが、ボランティアを始めた当初は障がいを持った子どもと関わるのが初めてだったのでおっかなびっくりで腫れ物に触るような形で子ども達と距離を置き接していました。やはりそれでは子どもたちは私に心を開いてくれないということを学び、他のスタッフの方々の関わりを参考にさせていただきながら自分なりに子どもたちと向き合っていくようになりました。そうすることで「染谷せんせい、染谷せんせい」と言いながら子どもたちがかけてきてくれたので自分から一歩を踏み出して行くことがとても大切だと思うことができました。
　私は今、小児科の看護師として働いています。病院という特殊な環境にいる子どもたちはお母さんと離れている不安や治療に対する恐怖を抱えています。入院してきて間もない子どもたちが夜中中泣いて「なんで寝ないの？」というぐらいずっと泣いている子が多いです。そのような環境の中で、ボランティアを通じて学んだ子どもたちに寄り添っていくことを大切にして日々関わっています。皆さんがご存知の疾患であれば、喘息や肺炎などがあると思うのですが、そのような子どもの疾患は入院期間が短かったりします。しかし子どもは特殊な疾患になってくると長期入院の子もいて一年ぐらい入院している子もいます。そういった中で長期の子も短期の子もそうなのですが、子どもたちひとり一人の性格や年齢に合わせた関わり方というのはすごく大変でうまくいかないことも多々あります。ですが子ども達と向き合うにあたって寄り添うことはもちろんなのですが子どもたちは注射を嫌がることが多くて点滴を入れるのにルートが入っているのですが非日常的なことが嫌で手を動かし抜いてしまうことがよくあります。子どもが嫌がることには何かしらの意味があるので、その意味を乳幼児の子たちは言葉がしゃべれないので泣き喚くことがすごく多いのですがそのようなところで子どもたちの意識をそらすこととか、学童の子とか話せる子たちには「今何が嫌なのか」ということをしっかり話していって、特に学童の子たちは自分が治療に向かっていけるように関わっていくことが大切だなというように学びました。そうすることで子どもたちも心を開いてくれ、笑顔を見ることができるようになります。しかし、病院でもスマイルでも小さな社会でありお家ではありません。その小さな社会のルールを守ってもらいながら、病院では安全にスマイルでは楽しくその時間を過ごせるように今後も子どもたちと関わっていきたいと思います。
　仕事をしながらなのでなかなか行けずご迷惑をおかけしていると思いますが、これからも自分なりに子どもたちと関わっていきたいと思います。

## ４鈴木　香弥子さん（幼稚園教諭）

はじめに私事ですが、私は現在流山の私立幼稚園に勤めております。途中、子育ての為に退職をしましたが、復帰をし２２年がたちます。今年は年中組の担任をしています。一クラス３６人の中に自閉症スペクトラム障害と診断された子が２人、そして難聴の為両耳に補聴器をつけ、私の声を FM 補聴器でつないでいる子もいます。毎日が時間に追われ奮闘する中、成長の穏やかな子に対してどんな指導をしていったら良いのだろう、そしてクラスを一つにまとめる為に３６人の足並みをどのように揃えたら良いのだろうと今年は悩むことの多い一年でした。

そんな時、スマイルクラブとの出逢いがありました。昨年４月、スマイルクラブのバレーボール教室に入会しました。バレーボールはまったくの初心者。なぜこの年になってかと申しますと、現在大学１年の娘がおり、その娘のバレー部のおっかけを中学、高校としていました。その楽しみが卒業と共に消え、どうしてもあの体育館が忘れられず、なら自分がやってしまおうと扉を開きました。それをきっかけに「運動が苦手な子の教室」の存在を知り、今の私の悩みの解決の糸口が見つかるかもしれないとボランティアに参加させて頂きました。

スタッフの皆さん、そして子ども達が温かく迎え入れてくれたおかげでどんどん引き込まれていく自分を感じていました。発達の様々な子ども達は、年齢を問わずとても澄んだ目をしていて、成長するにつれ薄れていく子どもらしさ、素直な心をもっていました。そんな子ども達に関わらせてもらう中、いくつもの喜びを感じました。

ある中学生の男の子が、一列に並んでスタートラインに立ち笛の合図を待っている時、ちょっと外れて立っている私を見てそっと腕をつかみ自分の隣へ。「ここに入っていいよ！」と導いてくれました。私は、その人を思いやる優しさにとても温かさを感じ、嬉しく思った思いを今でも忘れることができません。

又、幼稚園年長の男の子との関わりの中、初めは手をひいて一緒にやるというよりはやらされていた姿が、回を重ねるごとに小さな成長が見え、それを積み重ねることで今では手を差し伸べると自分から手をつなぎに来てくれるようになりました。ちょっとしたアプローチで自ら参加しようとする意欲が見られるようになったこと。そこには言葉を通しての意思疎通はありませんが、心でつながることができたのかなとうれしく思っています。又、その背景にある親御さんの笑顔を見ると、大切なお子さんの子育てに少しでもお手伝いすること

ができたのかなと自己満足しています。

私にとってボランティアのあの時間は、自然と笑顔になれ、心温まる、エネルギーをもらえる時間。初めは子ども達の為にと、お手伝いに行っていた私でしたが、実は私が子ども達に心の栄養をたくさんもらい、心洗われている時間でした。

そんなすてきな時間に共に関わられているスタッフの皆さんの姿。そこにも私が忘れていた大切なことを思い出させて頂くきっかけとなりました。私は障がいをもっている子に対してどんな指導法があるのだろうと探していました。そんな時、スタッフの皆さんの姿にもっと大切なことがあると気付かされました。それは「待つ」という姿勢でした。発達の様々な子ども達は、何をやるにも一筋縄ではいきません。なかなか気持ちがのらなかったり、思い通りにいかずかんしゃくを起こしたり、原因がわからない時すらあります。それでも待ってあげる。そしてどんな小さな事でも出来たという達成感を共に喜び合う。その姿は保育の原点でした。一人一人みんな違ってあたり前。クラス担任は子ども達にとっては一人ですが、担任は３６人、一人一人の先生であり、３６通りのアプローチが必要であり、心がけていきたいことでした。長年、保育にあたりベテランといわれる年になり、きれいな保育、スムーズな保育に気をとられ、足並みを揃えることに力を注いでいました。しかし、ボランティアに参加させて頂き、大切なことを思い出し、子ども達と向き合う姿勢がかわりました。腰を下して子どもの目線に立ち、関わる。そこには、子どもの本来もっているかわいらしさがひしひしと伝わってきて、子どもの違った一面も見ることができました。

「みんな違ってそれでいい！」成長の様々な違いが、その子のもつ個性として捉えられたら、特別な指導法なんてないのかもしれないそんなふうに思えるようになりました。その子が感じる困った感を理解してあげ、その困った感をとってあげられたら、その子の持つ力を伸ばし、発揮することができるのではないだろうか。私はそんな子ども達の気持ちが感じとれる教師でありたいと考えるようになりました。私にとってこのボランティア活動が大きな転機となったように思える今、この場に携われたこと、そしてスタッフの皆さんに感謝の気持ちでいっぱいです。ボランティアは自分が自分らしくいられる場所です。これからも「運動が苦手な子の教室」にてたくさんの子ども達と触れ合い、お手伝いができたのなら、幸せと思っています。

## ５和志武　勇士さん（千葉県立松戸高等学校）

私は、４年前にボランティアスタッフとしてスマイルクラブで１年間お世話になりました。スマイルクラブの子ども達との関わりや指導体験を通して、様々なことを学び、感じ、成長させて頂きました。今現在、千葉県の教員として教育現場に携わっておりますが、スマイルクラブでの経験が私の中に生きていることを日々感じております。数多くのことを学ばせて頂いたボランティア体験でしたが、当時のスマイルクラブでの経験と現在の仕事を通して学んだ点を以下の二点にまとめさせて頂き、報告とさせて頂きます。

まず、私がスマイルクラブでの活動を通して学んだことは、人との関わりが人を成長させるということです。現在の勤務校でも、授業、クラス、部活動など、生徒との関わりは複数あります。それぞれの場面で感じることは、保護者や友人、先輩後輩、教職員など、その生徒に関わる人間を少しでも多くすることが、生徒の成長に大きな影響を及ぼすということです。例えば、クラスの様子では出てこなかった、私の担任学級生徒が抱える悩みを、他の授業担当者や部活動の顧問教諭が生徒の様子から気付き、解決に向かったことがあります。こうした例はほんの一例で、生徒の善行もそうでないことも、複数の立場から関わることで気付き、生徒に働きかけられることが多々あります。子供が成長していく上で、生徒が様々な人から学び、多くの視点で見守られていくことは必要不可欠なことだと身をもって実感しています。そうした観点から考えると、運動が苦手な子の教室は、教室に通う子どもたちが成長する場として大きな役割を担っていると強く感じました。自閉症などの発達障がいをもった子どもたちは、通常学級の体育授業などで遅れが生じるものの支援が不足していたり、習い事などの学校外での活動に参加しにくい現状があり、誰もがもつ「成長したい」という思いを実現できる機会を少なからず奪われてしまう場合があります。しかし、「運動が苦手な子の教室」があることで、通っている子どもたちが運動技能を向上させていくだけでなく、関わりの場を通して社会性を少しずつ高めたり、その子自身の変化を気付いてあげることができると感じました。スタッフ、ボランティア、教室の子ども達、保護者と多くの目があることがその子どもの成長に関わっていること、そして、そうした効果のある「人との繋がり」の重要性をスマイルクラブでの活動を通して学ぶことができました。

次に、子ども達に対して何が出来るのかを考えることが、子ども達だけでなく自分自身を成長させるということです。子ども達と一緒に活動をする中で、「この子が〇〇を出来るようになるためにはどのような働きかけがいいのか」

や「どうしたらこの子が話を聞いてくれるのかな」といったことを何度も考えさせられました。特に、ボランティアに参加し始めた頃の私は、子ども達との距離感や関係の築き方に戸惑うことが多く、その時に持ちえる自分の尺度で子どもを見ていたり、不十分な指導でうまくいかないことが大半でした。しかし、スタッフの先生方の指導法を見聞きしていく中で、個々の子ども達に対する見方が変わったり、自分はどのように働きかけようかと考える機会が増えました。すると、正解だったと言えることは少ないですが、「この子にはこの話題で会話をしてみよう」といったことや、「走るのが大好きなこの子の競走相手になれるのは自分だな」など、子どもと自分自身との関わり方や指導の仕方を見つけていくことができたように感じました。それは、子どもの成長に携われた一方で、自分自身も成長させてもらった瞬間でした。常に子ども達に対して何が出来るのかという考えを持つことは、今の教員生活の中でも根底になければならない部分であり、必要不可欠なことです。子どもの成長に関わる者として大切な基盤を、スマイルクラブでの活動を通して学ぶことができたと感じています。

以上の２点が、私がスマイルクラブの活動を通して学び、現在の仕事に携わる中で感じた、スマイルクラブから得た大切なことです。これら以外にも、発達障がいへの関心をもつことができたこと、また、そうした子ども達への理解など、それまでの私の中になかった精神面での成長をさせてもらったと思います。数多くの気付きと学びを与えてもらったスマイルクラブの皆様に感謝すると同時に、今回の縁で得た繋がりを大切にして、今後とも自分を成長させられるよう努めていきたいと思います。貴重な体験の場を与えて頂き、本当にありがとうございました。

発達障がい児の運動指導に携わる
　　スポーツボランティア養成事業について

千葉県立柏中央高等学校
宮部　栄一

私が勤務する千葉県立柏中央高等学校は、千葉県の福祉教育推進指定校であり、校内では「命を大切にする」と題した講演会を毎年行い、また、インターンシップとして施設や病院でのボランティアに参加することを積極的に呼びかけている。生徒の意識も高く、インターンシップ参加者は３学年で１００名を超え、先方の評価も悪くない。

しかし一方で、インターンシップ以外のボランティアの募集には、ほとんど生徒が集まらないという現状もある。インターンシップの場合は千葉県が斡旋し、校内でも事前指導を行なう。生徒にとっては参加する前に詳しい情報が得られ、仲間も大勢いるので安心なのである。その上、参加することで単位をもらえる所があったり、大学入試の願書に書けるなどという打算も働く。

今回、「発達障がい児の運動指導に携わるスポーツボランティア養成事業」の委員をやらせていただくことになり、研修会・講習会が行われるたびに校内でボランティアを募集した。興味を示す生徒も多くおり、特に「水泳教室」は夏季休業中の実施とあって２０名近くが聞きに来たが、残念ながら参加者は４名であった。二の足を踏む理由は「障がい児」と「指導」である。曰く「障がいを持つ子供と、どう接してよいのか分からない」、「子どもを指導する自信がない」などというものだ。水の中で一緒に遊んで、プールは楽しいと思ってもらえれば十分、と説明したのだが、不安を解消させることは出来なかった。

本校体育館で行われた２回の「技術指導講習会」も、本校生徒の参加は私が顧問をする男子バレーボール部員１２名だけであった。「技術指導」などというと、「なんだか難しそう」と思われてしまったのかも知れない。

大多数の高校生にとって、学校外で他者と関わり、人間関係を構築し、その人のために何かをするなどという行為は今まで経験が無く、不安なことであるに違いない。だから、何かをしたいという意識をもちながらも躊躇してしまうのであろう。今後、このような生徒たちをどのように取り込んでいくかが課題である。

参加した生徒たちは楽しさややりがいを感じており、私自身も生徒と共に、今後もスマイルクラブの事業に関わっていきたいと思う。

発達障がい児の運動指導に携わる
　　スポーツボランティア養成事業を通して

千葉大学教育学部
谷藤　千香

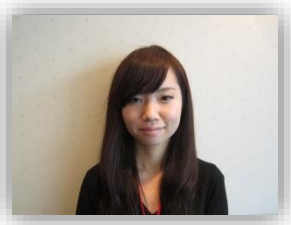
事業の集大成とも言えるボランティア体験発表会は素晴らしかった。発表者は、大学生、有職者と様々であったが、いずれも数か月、数年にわたるボランティア経験者で、発達障がい者を含む「運動が苦手な子の教室」における運動指導に携わった経験を通して考えたことをきらきらと語ってくれた。「子どもがイヤというには意味がある」「ここに入っていいよ、という温かさ」「困った感に寄り添う」など現場を経験したからこそ言える多くの名言が飛び出し、とりわけ、大学生等の若い世代からは、子どもの接し方、できた喜び、指導者としての働きかけなどについて現場でスマイルクラブのスタッフや他の指導者から学ぶことができ、社会に出るにあたっての自信が得られた、多くの子どもたちや子どもたちに寄り添うスタッフの立ち振る舞いから多くの視点を持てるようになった、夢や使命感が芽生えた、ボランティアは自分が自分らしくいられる、と自分自身の変化についても多く語られた。ボランティアは運動教室などの事業を支える重要な役割となるばかりでなく、ボランティア経験はその後の生き方にも影響を及ぼし、人との繋がりを大切にする彼らの力は地域の活性化に大きな貢献をするであろう。地域の活性化は、スポーツ振興において重要なテーマである。近年、総合型地域スポーツクラブがその役割を担いつつあり、NPO 法人スマイルクラブは総合型クラブの先進的クラブとして、以前から千葉県広域スポーツセンター主催のクラブマネージャー養成講習会においてその活動内容が紹介されていた。運動が苦手な子のため運動教室や障がい者と健常者が一緒に活動する運動教室は他の総合型クラブと連携して広範囲な活動を行っていることも知ってはいたが、発表会を通じてさらにボランティアの存在の大きさを感じた。

委員会は、はじめに本事業の趣旨についてスマイルクラブのこれまでの活動内容と合わせて非常に丁寧に説明がなされた。また、委員はスマイルクラブのボランティア OB であり現在は特別支援教育に携わる先生方や障がい者スポーツや発達障がい者支援を専門とする先生方、社会福祉に携わる方等で構成されていることもあり、初回から多くの意見や具体的な提案が出され、非常に勉強になった。ボランティア養成事業は 1 年間という短い期間にもかかわらず、「運動が苦手な子の教室」のボランティア募集と教室におけるボランティア研修に始まり、ボランティアのための安全研修会（CPR&AED）や技術指導講習会の開催、また、ボランティア体験の機会提供として、通常の教室以外にも、運動が苦手な

子のプール教室、風船バレー交流体験会、ボウリング大会、講演会＆運動体験会、フロアバレー体験会、ファミリー風船バレーボール大会、ID バレーボール大会など多くの事業が実施された。残念ながら実際に現場を見ることができたのは、講演会＆運動体験会だけであったが、当日はパラリンピック金メダリストの河合純一さんの講演ということもあり多くの参加があり、日頃ボランティアをしているという高校生らが熱心に話を聞いているのは非常に印象的であった。委員会でも、中学生のボランティア希望者について話題に上がったことがあったが、若年層からボランティア意識が高いことは、今回の事業に留まらずクラブのこれまでの活動の成果だと感じた。

委員会を縁に、今年度大浜理事長に障がい者スポーツについて千葉大学で講義をお願いし、また社会体育実習としてボランティア等の体験を含め学生の実習を受け入れて頂いた。どちらも、学生からのインパクトは非常に大きく、この縁を大切にし、発達障がい児の運動指導に携わるスポーツボランティア養成が広く長く続けていけるよう微力ながら貢献していきたい。

## 発達障がい児の運動指導に携わる<br>スポーツボランティア養成事業について



社会福祉法人柏市社会福祉協議会
ボランティアセンター　吉本　祥子

私は、日頃ボランティアセンターの職員として、ボランティアの育成や活動支援の他、地域の担当として地区社会福祉協議会をはじめとした地域活動の支援に従事しています。今回、「発達障がい児の運動指導に携わるスポーツボランティア養成事業」の委員を仰せつかりましたが、十分に役目を果たしたかどうか不安で、むしろ私の方が勉強をさせて頂き、今後の業務に活かすヒントをたくさん頂いたように思います。

特に、ボランティア体験発表会では、様々な立場でボランティアに関わる活動者から話しを聴くことができたのは、大変勉強になりました。一方で、日頃活動者からじっくりと想いを聴くような時間がほとんどなかったことを反省しました。ボランティア体験発表会は、一人ひとりの想いに耳を傾けるだけではなく、同じ想いの仲間と時間を共有することで、モチベーションの維持向上にもつながる良い機会だと感じました。そして、お話しを聴く中で、活動を始めるきっかけや経験の有無を問わず、ボランティアの方が長く楽しく活動を続けていくことができるのも、スタッフの方の日頃の惜しみない努力があってこそだと改め

て思いました。

ボランティアの養成や、担い手不足の問題については、多くの団体が抱えているものであり、同時に私達ボランティアセンターで考えるべき大きな課題でもあります。潜在的な人材をいかに発掘していくか、特に若い世代にどうアプローチしていくかといったことを考えますが、いつも思うのはネットワークの大切さです。現在は、学校や企業等との関係作りに力を入れていますが、今後はさらにネットワークを広げ、重層的なものにしていきたいと考えています。そして、今回のような育成事業に少しでもお役に立つことができたらと思います。

ボランティアのニーズは多岐にわたり、今や生活のあらゆる場面と関わりがあります。福祉がより良い暮らしを求める well-being の考え方に変わる中、スマイルクラブのような活動は、これからますます必要とされてくるものと思われます。スポーツクラブや体操教室が当たり前に存在するように、スマイルクラブも当たり前の存在になるよう、まずはより多くの方に、活動を知って頂く必要があります。

ある発表者の方が、「子どもたちの笑顔は、私達のことも笑顔にする大きなパワーがある。」と仰っていました。これからも、「運動が苦手な子」の笑顔がたくさん増え、スタッフの皆様もにこやかに楽しく活動を続けることができるよう願っております。そして、そのために少しでもボランティアセンターでお手伝いさせて頂けたら幸いです。

## 発達障がい児の運動指導に携わる
## スポーツボランティア養成事業を通して

千葉県立松戸高等学校
和志武　勇士

平成２６年度の１年間、以前お世話になったスマイルクラブでスポーツボランティア養成事業の委員として、関わりを持たせて頂きました。私は主に、スマイルクラブからご案内頂いた講習会やイベントを勤務校で告知したり、教育・福祉関係に興味をもっている生徒がいたら訪ねてくるようにという働きかけを行いました。この一年間の活動を通して感じたことを、反省を交えながら記載させて頂きます。

まず、発達障がい児に運動指導をするということが、自分にはできない、難しいと感じている高校生が多いということです。校内生徒に告知したものの生徒からの反応がほとんどなく、学級生徒に聞いてみた反応を省みると、「障が

い」という言葉がもつイメージから発達障がいの子どもと関わることへの困難さや、自分とは遠いところで行われていることといった先入観を持っているように感じました。発達障がいのことを広く認知してもらったり、興味をもってもらう機会となればと思い告知しましたが、生徒の意識付けまでには結び付けられませんでした。しかし、私の勤務校では希望者に限られますが、近隣の特別支援学校に訪問し、特別支援学校の生徒と共に一日を過ごし、一緒に活動をする「交流会」と呼ばれる学校行事があります。毎年、六月と十一月の二回設けられており、数十名の参加希望者が出ています。実際に交流会に参加した生徒の反応を見ると、特別支援学校の生徒と関わることの楽しさや難しさを感じたり、障がいをもつ方々への理解を深められたなど、様々な感想をもっています。そうした生徒を一過性の体験で終わらせてしまうのではなく、スマイルクラブの活動などを通して、継続性をもって取り組む機会を増やすことが出来れば、スポーツボランティア養成に繋がっていくはずですので、今後は告知勧誘をする生徒の絞り込みをやっていきたいと思います。

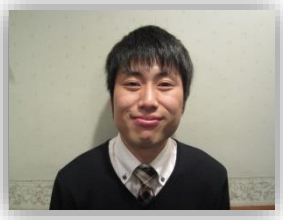
また、この事業のメリットとして、ボランティアに関わる生徒にとって進路選択の機会になり得ることがあげられます。学校生活という限られた場所で過ごしている高校生は、仕事に対するイメージも限られたものであることが多いです。教育や福祉に興味がありながらも、実際の現場を知らず、印象だけで進路を決めてアンマッチが生じる場合も往々にしてあります。そうした生徒に、印象だけで決めるのではなく、一部分であっても実際の指導体験の場で感じたことを踏まえて、進路選択をさせることがこの事業で期待できます。やりがいや楽しみを感じ取ってもらった生徒には、さらにその先の進路へ向かう原動力にもなるはずです。今後は、より効果的な進路選択の機会として勧めることができるような手立てを考えていく必要性を感じました。

最後に、体験を通して、先に述べた「障がい」に対する先入観を取り払い、理解に繋がることに一助すると感じました。私自身、発達障がいという障がいがどのようなものかということを教職の勉強で知ってはいたものの、それらはほんの一部分で、実際にボランティア体験したことで、子ども達にどのような個性があって、どのようなハンディキャップがあってといったことを知ることができました。教員になった現在でも、受け持った生徒に発達障がいの傾向が見えた場合に、体験で得た理解があるおかげで、その生徒に対する支援の幅をいくらかもつことが出来たように思います。進路選択も障がいのある方に対しても、印象が先行してしまうケースが多いので、実際のボランティア体験を通して感じ取った部分を、発達障がいの認知や理解に繋げることができればと思いました。そして、その積み重ねで、発達障がい児や障がいのある方への理解者が増え、運動指導のみならず、発達障がいに対する垣根を下げていくことに

なればと感じています。

以上が、この事業に関わらせて頂いて私が感じた事柄です。スマイルクラブの活動も継続的に取り組んできた結果が、教室数の増加や認知の拡大などの成果に繋がっているものと思います。私も、生徒の進路選択や発達障がいへの理解など道徳心の育成の効果を踏まえ、委員であった今年度だけでなく、継続的に生徒に働きかけていけるよう努めていきたいと思います。私自身、力不足であり、本事業になかなか貢献できず申し訳ありませんでした。前述の通り、今後も微力ながら、継続的に生徒に働きかけていきたいと思いますので、よろしくお願い申し上げます。

**「スポーツボランティア養成事業」報告書**



千葉県立つくし特別支援学校
宮下　和洋

今回、ボランティア養成事業に参加させていただき、感じたことを報告させていただきます。

はじめに、大学教授や高校教員など多岐にわたる職種の方々を役員として招き、どうすれば、ボランティアに興味をもってもらえるか、参加してもらえるかを、広い視野で話し合うことができたことが良かったと思います。実際に、チラシのレイアウトを変えたり、学生や高校生が参加しやすい時期について話し合ったりすることで、多くの方々にボランティアに参加していただき、スマイルクラブの活動を知ってもらうことができたのではないかと思います。

また、スマイルクラブの活動やボランティアの内容について、分かりやすくホームページやパンフレットで示すことで、スマイルクラブの会員の方々だけでなく、初めてボランティアに参加する方々にとっても、安心して活動することができたのではないかと思います。

先日行われました、ボランティア発表会では、子どもたちとの日々の関わりから、ボランティアをすることの意味について様々なご意見をいただくことができました。改めてスマイルクラブの活動そのものの、重要性を実感することができました。

私自身も、スマイルクラブ「運動の苦手な子の教室」のボランティアに参加させていただき、障がいのある子どもたちとの関わりを通じて、もっと特別支援教育について学びたいと考えるようになりました。ボランティアを通じて、様々な人との関わりから、自分の将来や生き方を見つめ直したり、考えたりするきっか

けを与えてくれる意味でも、ボランティアをすることの大切さを感じることができるのではないかと思います。高校生や中学生のようにもっと若いうちから、スマイルクラブのボランティア活動を経験することができれば、みんなで体を動かすことの楽しさや障害理解についても考えられるようになるのではないかと思いました。

特別支援学校で勤務して２年目になり感じることは、障がいへの理解や配慮というものが、まだまだ世間一般には、成されていないということです。知的障がいや自閉症など障がいをもった子どもたちでも、自分らしく生きることができるためにも、スマイルクラブのように、学校以外の彼らの居場所づくりや余暇の充実が大切であると思います。そういった時に力になるのは、様々な人が、障がいのある子どもと関わること、そのための「機会」をつくることだと思います。今回のボランティア養成事業のように、継続して沢山の方々にボランティアに参加していただけるよう、今後も大学や高校などの教育機関を通じて、ボランティアを募集していくことが重要だと思います。

そのためにも、中学・高校と連携を図り、進路学習やキャリア教育の一環として、スマイルクラブで、ボランティア経験を積むことを促したり、大学と連携して、講義の終わりに、スマイルクラブの取り組みについてＤＶＤを見せたり、説明したりしながら、活動を紹介することで、スマイルクラブのボランティア活動に興味をもってもらえるのではないかと思います。

また、可能なら高校生や大学生に、ボランティア活動そのものについての意識や考え方を知るためにもアンケートを実施して見るのも良いかと思います。アンケート結果から、「いつならボランティアができるのか」や「どんなことがしたいのか」など、中高生や大学生の感じていることが何かを知ることで、今後の事業に活かすことができるのではないかと思います。

来年度も、沢山のボランティアがスマイルクラブの会員の方々と関わることで、双方にとって有意義なものとなるよう、私自身も微力ながら貢献していきたいと思います。

ありがとうございました。

## 本事業を通して

今年度、日本財団の助成を受け「発達障がい児の運動指導に携わるスポーツボランティア養成モデル事業」を実施できたことは、様々な課題を解決するための糸口を見つける大きな一歩になったのではないかと思います。発達障がい児も一緒に参加する「運動が苦手な子の教室」やイベント等へのスポーツボランティアの確保、養成、ネットワーク作りととても大きな成果を残すことができました。

また、今回、高校、大学の先生方、社会福祉協議会ボランティアセンターの職員の方などさまざまな立場の方に委員を快くお引き受けいただき、委員会を開催することができました。その中には、実際にスマイルクラブにボランティアで参加した経験を持ち教員になり、今度は委員として協力してくださるという素晴らしいつながりになりました。また、大学からインターンシップの受入れや社会体育実習の受け入れなど大学とＮＰＯの新しい関係を築くことも出来ました。委員の方々が学生や一般などへ向けてボランティア募集の周知をして下さることが、高校生や大学生のボランティアへの参加を促す大きな力となりました。その中でも、ボランティアセンターに掲載いただいた活動紹介からは中学生の参加があり、その意欲と真摯に取り組む姿勢に驚かされるばかりでした。ボランティア体験発表会での発表者の言葉から、彼らがボランティアとしてサポートをすることで発達障がい児を知り、理解し、そして寄り添う事へとつながっていることを強く感じることが出来ました。また、学生のみなさんだけではなく専門職についた方がボランティアに参加し、そこで得たものをまた社会に還元していくという好循環も生まれています。これからもたくさんの人達にこの体験をしてもらいたいと思っています。

今後も今回の成果を基にして、多くのボランティアを育て、活動を広げていけるよう努力をしていきたいと思います。

ご多忙の中ご協力いただきました、「発達障がい児の運動指導に携わるスポーツボランティア養成モデル事業」委員会の委員のみなさま、および関係者のみなさまに心よりお礼を申し上げます。ありがとうございました。

NPO 法人　スマイルクラブ
事務次長　山　田　亜矢子

「発達障がい児の運動指導に携わるスポーツボランティア養成事業」委員会

委　員　一　覧

宮　部　栄　一　　千葉県立柏中央高等学校　教諭

川　北　準　人　　東京成徳大学　教授

谷　藤　千　香　　千葉大学　准教授

渡　邉　貴　裕　　順天堂大学　准教授

和志武　勇　士　　千葉県立松戸高等学校　教諭

宮　下　和　洋　　千葉県立つくし特別支援学校　教諭

吉　本　祥　子　　社会福祉法人柏市社会福祉協議会ボランティアセンター

大　浜　あつ子　　ＮＰＯ法人スマイルクラブ理事長

大　浜　三　平　　ＮＰＯ法人スマイルクラブ理事

山　田　亜矢子　　ＮＰＯ法人スマイルクラブ事務次長

佐　藤　　楓　　ＮＰＯ法人スマイルクラブスタッフ

smile club

surroundings where everyone can easily enjoy sports

SINCE 2000